

## 『雲の墓標』作品解説

〔初出・初版〕昭和30・1～12「新潮」。昭和31・4、新潮社刊。◇京都大学の吉野次郎は昭和18年12月、学徒動員で級友の藤倉晶や鹿島・坂井らと海軍に入隊して予備学生試験を受けた。鹿島は一般兵科を選んだが、吉野・藤倉・坂井は航空科に合格し、土浦・出水両航空隊での訓練を経て19年9月、宇佐航空隊に配属された。吉野は鹿児島出水で知った落子への恋情を秘めながら、「定められた運命の下に、自分を鍛えることだけが、われわれに残された道だ」と覚悟するが、藤倉は批判的で大学の恩師に「私たちはつひに特攻隊を志願させられた」と手紙を出した。が、その直後、訓練中に事故死する。20年3月、敵機が沖縄に来襲。坂井に出撃命令が下る。宇佐基地も爆撃されて吉野は茨城県百里原に移り、7月9日、両親と鹿島に遺書を書いて木更津航空基地を飛立って行った。実在の海軍飛行予備学生の日記をもとに、同世代の若者の海軍予備学生の体験と友情を投入した作品で、日記と手紙という形式が臨場感と迫力に富み、吉野と藤倉を対蹠的に描いて立体感を持たせ、主人公の姿勢と心境を際立たせることにも成功している。戦時下の極限状況のなかで真摯に生死を選択した若者の苦悩が鮮明に描出され、同時代を送った者のもとより、世代を越えて共感をよび、戦争文学の傑作として発表当時絶賛され、その評価は定着した。

『日本現代文学大事典・作品編』(明治書院・1994)より

今戸公徳『遙かなる宇佐海軍航空隊』『明日は出撃だ』より  
雑誌『丸』(潮書房・2003.1)より

「……長閑な風景の中で戦闘に臨む士官としての心身の鍛練は続行されたのである」と「宇佐空三カ月の想起」の中に竹田延氏は記しているが、八月末までの三カ月間、藤井(真治)中尉(当時階級)は、文字通り四十九人の指導にあたるわけだが、いまだにその人柄が偲ばれ慕われ続けている藤井分隊長とは、どんな人で、どのような指導をしたのであろうか。

むしろ、バアーバリックな気風の濃かった中で、ひときわ、ユニークであったであろう藤井大尉の面影を追ってみたい。

松下竜一『私兵特攻』著作自解『図録松下竜一その仕事』より

一九四五年八月十五日正午に日本の敗戦が決まったが、それを承知で第五航空隊司令長官宇垣纏は彗星十一機を率いて大分飛行場から沖縄へと出撃した。歴史の秘話「最後の特攻隊」を追うノンフィクション。

## 宇佐航空隊の世界

### —雲の墓標—

ごあいさつ

阿川弘之の小説『雲の墓標』は、太平洋戦争末期、特攻隊員として各地から飛び立っていった海軍予備学生たちの真実の姿を、一学徒兵・吉野次郎の日記の形で描いたものです。

「雲の墓標」とは、出撃を控えた吉野が友人宛に書いた遺書の中で、

雲こそ吾が墓標

落暉よ碑名をかざれ

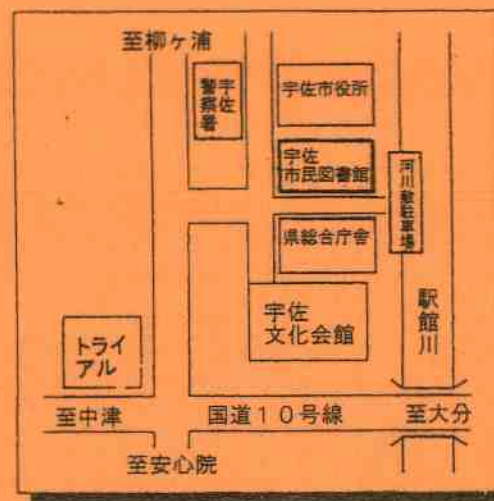
とあるのによります。この題名は、特攻隊員の悲痛な思いを一言で言い表していると思います。来年は戦後60年となりますが、私達はこれらを過去の記憶として風化させることなく、次代へと継承していかねばなりません。

この小説にも登場する宇佐海軍航空隊は、練習航空隊として昭和14年開隊されました。その後、昭和20年3月に作戦部隊となります。前月の2月から特攻隊が飛び立つようになったことと合わせ、この頃より頻りに空襲を受けるようになり、それは終戦間際まで続きました。そのため、宇佐には掩体壕などの戦争遺構や遺品・遺物が残っています。

今回の展示では、「雲の墓標」を軸に「宇佐航空隊の世界」を表現してみました。宇佐の昭和史をみつめなおし、平和を考える機会となれば幸いです。

平成16年6月

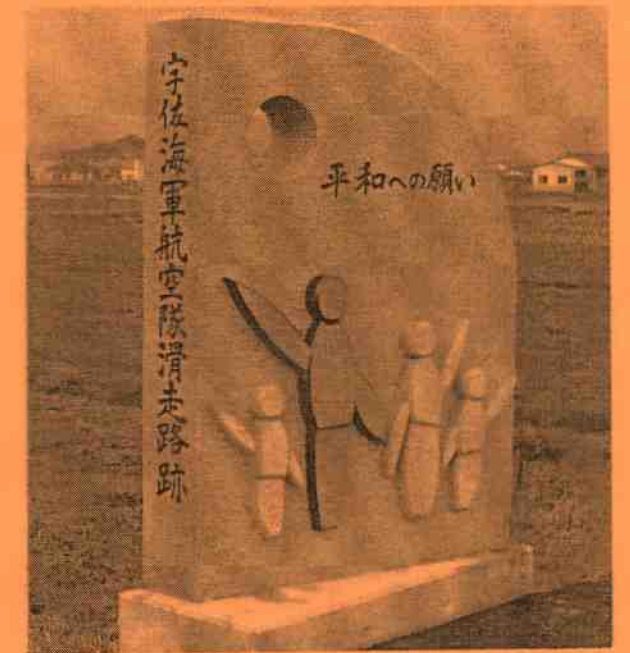
宇佐市教育委員会



平成16(2004)年6月19日 / 発行・宇佐市民図書館  
大分県宇佐市上田1017-1 TEL.0978-33-4600

# 宇佐航空隊の世界

## —雲の墓標—



2004.6.19 ~ 8.29

10:00 ~ 18:00 (日曜のみ ~ 17:00)  
休館日…毎週月曜日・祝祭日・月末木曜日

宇佐市民図書館  
渡網記念ギャラリー



### 阿川弘之『雲の墓標』(新潮社)1956

(昭和二十年)四月十二日

夜半三時ごろ、B29少数機の来襲があって、高度ひくいらしく、圧迫するような金属音が聞えていたが、みんなねむくてねむくて、一蓮托生ときめこんで誰も起きなかった。

けさは八時二十分に艦爆の特攻隊が出撃した。午後一時ごろ申良を発進、艦攻部隊とともに突っ込む予定である。これで艦爆の特習学生で飛行作業をつづけていた者は、全部出た。艦攻も、宇佐空には飛べるのは、もう一機ものこっていない。自分はまた生きのびたい。うれしいとか倖せだとかいうだけの気持ちにはなれないが、やはり或る感懐をおぼえずにはいられない。

(昭和二十年)四月二十一日

B29の爆撃を二回にわたって受ける。(中略)八時三十分十機、同四十五分に十二機、当直室前に一弾落ち、となりの電信室にも一弾、飯を食いに当直室を出ていなかったら、少なくとも大怪我をしているところであった。二回目の来襲のとき、隊門衛兵の四十四五の老兵、気がへんになり、「ワーッ、ワーッ」とさげんではしりまわって退避しないので、なぐりつけて地べたに伏せさせた。自分は鼓膜をいかれて、一時物音がほとんど無くなった。わずかこれだけの来襲で人員損害異常に大きく、死者二百名に達せんとす。艦攻学生七名、艦爆学生二名も戦死した。警戒が解けて朝食の卓にあつまっていた者が多かったのだ。佐世保の管内にはいるべき宇佐空が、呉鎮管下にはいっていたのがいけなかった。

頭のない者、手だけの死体、はらわたをちぎられた臓物のかたまりのような者など、それに麻酔剤が欠乏して、麻酔なしで足の切断手術をやっているの、病舎の方から、阿鼻叫喚のうめき声が聞こえて来る。

時限爆弾が多数残っているため、飛行場は完全に使用不能となった。命令の伝達困難をきわめ、死体の収容もなかなかかどらない。自分もバケツを持って出て、手首や、靴をはいたままの足などを拾って来る。爆弾の破片で脳を半分にしたなどの、藤倉のときと同じに、断層のようになっていて血もでていない。

われわれの宿舎の女学校も、焼夷弾のため焼失した。自分は靴をうしなただけで衣類はたすかったが、女学校の生徒たちには、ほんとうに気の毒なことであった。朝からなんにも食わず、午後二時ごろ握りめしを一つ食っただけ。(中略)

駅館川べりの横穴にねむる。夜中うめき声絶えず、其のうち息を引きとった奴を運び出す「重いな」「うん」などという声が、すぐとなりから聞こえて来る。

### 展示目録

#### ●【雲の墓標/阿川弘之】

- 阿川弘之(肖像写真とプロフィール) 1
- 『雲の墓標』作品解説 1
- 阿川弘之著『雲の墓標』(新潮文庫・1956) 1
- 画文集『雲の墓標』(500部限定) 2
- 文/阿川弘之・画/川崎春彦(アートプロデュース・1984) 9
- 阿川弘之『雲の墓標』関連写真パネル 9
- ・宇佐海軍航空隊正門/不時着した七式艦上攻撃機/駅館川東岸の防空壕/主人公が見たであろう横山谷の風景/出撃前の特攻隊員/宇佐航空隊の特攻隊員慰霊碑/畑田空襲の記憶(是恒義人・画)/空襲を受け大破した戦闘機/防空壕前を流れる駅館川の風景 11
- 阿川弘之『雲の墓標』本文パネル 1
- 小説に登場する藤井大尉(写真) 1

#### ●【遙かなる宇佐海軍航空隊/今戸公徳】

- 今戸公徳(肖像写真とプロフィール) 2
- 今戸公徳「遙かなる宇佐海軍航空隊」より、本文パネル 4
- 〔第1部〕「特攻基地」(『丸-エキストラ』2002.7)から 34
- 〔第2部〕「明日は出撃だ」(『丸』2003.1)から
- 今戸公徳「遙かなる宇佐海軍航空隊」連載誌 34
- 雑誌『丸-エキストラ』2000.3~2002.7(第1部・15回連載)
- 雑誌『丸』2002.10~2004.4(第2部・19回連載)
- 今戸公徳「僕の町も戦場だった」(『柳ヶ浦町史付録』所収)1970 1

#### ●【私兵特攻/松下竜一】

- 松下竜一(肖像写真とプロフィール) 2
- 新聞記事「松下竜一氏死去/反骨と草の根貫き」(『西日本新聞』2004.6.18) 1
- 追悼特集・松下竜一さんの本 12
- 『私兵特攻』(新潮社)『私兵特攻』(全集版)『豆腐屋の四季』『吾子の四季』『歎きの四季』『風成の女たち』『誓に拠る』『ルイズ』『母よ、生きるべし』『どろんこサブリ』『怒りていう、逃亡には非ず』『狼煙を見よ』 1
- 昭和20年8月15日の大分海軍航空基地(地図) 1
- 昭和20年8月15日午後4時過ぎの大分基地(解説) 1
- 一宇垣艦長官と最後の特攻隊員たち-
- 松下竜一『私兵特攻』関連写真パネル(寺司勝次郎氏提供) 6
- トラックで搭乗機に向かう特攻隊員たち/隊員に訓示する宇垣艦中將/出撃を前に階級章(中將の襟章)をはずす宇垣中將/宇垣中將、出撃前の記念撮影/2人乗りの「彗星」に、宇垣中將、中津留大尉、遠藤飛曹長の3人が搭乗/出撃発信

#### ●【宇佐空・特攻戦死隊員たちの遺影と関連資料】数字は没年齢

- 若麻績隆少尉(24)・堀之内久俊少尉(24)・松場進少尉(26) 39
- 糺本武次郎少尉(24)・円並地正壮中尉(25)・末藤肇少尉(24)
- 上野晶惟少尉・渡辺政則少尉・丸林勘一少尉・山口正人少尉・酒井昂少尉・萩原巖少尉
- ※吉用篤也氏寄贈の「宇佐空アルバム」を含む

#### ●【遺品・遺物・その他】

- 人間爆弾「桜花」のロケット噴射管 1
- 「桜花」の風防ガラス 1
- 「桜花」模型(10分の1)製作者:伊藤譲二氏 1
- 「桜花」一一型解剖図 1
- 九九式艦上爆撃機/九七式艦上攻撃機(モデル) 2
- ※宇佐航空隊で特攻に用いられた飛行機
- 別府「なるみ」に残された遺墨(軸装) 4
- 特攻人形(復元)と特攻人形を持つ出撃前の特攻隊員(写真) 2
- 米軍から投下された爆弾の破片 4
- 焼けこげた焼夷弾の破片 2
- 昭和20年8月8日の畑田空襲により炭になった米 1
- アメリカ戦闘機用13ミリ機銃弾/20ミリ機銃弾 7
- 航空隊で使用されていた食器類 6
- 双眼鏡、飛行眼鏡 2
- 戦闘機の計器類(照準計、高度計、電圧計、水準器) 4
- 起動用磁石発電機、スパナ、航空機写真撮影用時計 3
- 水筒(宇佐空の文字が残る) 1
- 航空隊主催運動会優勝校の刻印プレート 1
- 蚊取線香(円筒式多煙陸軍蚊取線香)※戦後、周辺の家に配給 1
- 「宇佐海軍航空隊基地」位置図 1
- 宇佐海軍航空隊跡地周辺の航空写真(昭23 米軍撮影) 1

#### ●【宇佐航空隊関連の本】

- 平和読本編集委員会『えん体ごうののこるまち』(小学校低学年用)1996 1
- 平和読本編集委員会『えん体ごうの残るまち』(小学校高学年用)1996 1
- 平和読本編集委員会『掩体壕の残るまち』(中学生用)1996 1
- 豊の国宇佐市塾編『宇佐航空隊の世界I~IV』1991~1998 4
- 柳ヶ浦小学校6年生『平和証言集-柳ヶ浦空襲の体験者による-』2000 1
- 戦争遺跡保存全国ネットワーク『戦争遺跡は語る』1999 1
- 城山三郎『指揮官たちの特攻』(新潮社)2001 1
- 豊田穰『新・蒼空の器』(光人社)1980 1
- 内田康夫『はちまん』上・下(角川書店)1999 2
- 須崎勝彌『蒼天の悲曲』(光人社)2000 1
- 須崎勝彌『カミカゼの真実』(光人社)2004 1
- 『大分文学』通巻8(2004年2月発行)日本民主主義文学会大分支部 1
- ※前川史郎「雲の墓標と宇佐海軍航空隊」を収録

#### ●【階段部導入写真】

- 月光のなかの掩体壕/豊前海にある爆弾投下練習用の「標的」 4
- 宇佐海軍航空隊滑走路跡記念碑「平和への願い」/海軍棧橋

#### ●【入口】

- ごあいさつと新聞記事「戦争の記憶とどめ」(『読売新聞』2004.5.21) 2